



Лилия・Глазунов (リーリヤ・グラズノフ)

ハル

暗殺はあつさり^{しじょう}と終わった。

あまりに容易に終わってしまったことに若干の肩すかしに似た感覚を覚えながら、リーリヤ・グラスノフはパーカーのフードを目深に被って帰途についていた。

都会とはあまりにかけ離れた、田舎特有の喧噪の無さを補うように泣き喚く蟬の音が鬱陶しかった。それらを追い散らすように、けたたましいパトカーのサイレン音が聞こえてきた。

二つの音は調和することなく、ただ不協和音となつて彼女の耳朶に鳴り響いた。

暑さという無視できない不快要素に加えてこれなのだから堪らない。

リーリヤは暑さが嫌いだった。

それ故に、じつとりとまとわりつくような湿度と熱気に苛まれる日本の夏が大嫌いだった。彼女の生まれた国であるロシアには夏を指す言葉が複数存在するが、それさえも彼女は好ましく思つた記憶がない。日本の夏に関しては、何をか言わんやだった。

八月。国内の至る所で猛暑日と記されたその日、彼女はロシアではなく日本——北陸の片田舎、その駅付近にあるバス停留所を兼ねた小さな広場——を目指して歩いていた。陶器を思わせる白い肌には既に玉のような汗が浮かんで

いる。

時折、上着のポケットから白い百合のワンポイントがあらわれたハンカチを取り出して汗を拭っていた。

視線を周囲に巡らせると、彼女よりもずっと暑苦しそうな格好をした警察官が複数人、気温をものともせず^ずに走って行く姿が見えた。

(ばかなひとたち)

自らの職務に忠実な彼らを横目に、熱気にうだる脳みそで何とか思考を巡らせる。

こうでもしないと暑さで気が狂つてしまひそうだった。

ほどなくして広場に辿り着いた。

広場には日光を遮る天蓋が設けられており、直射日光はないもののこの湿度は耐えがたいものがあつた。

ハンカチを仕舞っている方とは反対側のポケットから振動を感じた彼女は、これまでの鈍重な動作とは一転して素早い動きで手をつ込む。取り出されたのは今や時代錯誤とさえ形容できるほど古めかしい携帯電話だった。

「セリョージャ。暑い」

通話ボタンを押すや否や、彼女は電波の向こう側にいる相手に向けて唇を尖らせた。

まだ幼さを多分に残した声色で紡がれた抗議に、電話の

向こう側にいた相手が思わず苦笑を漏らす。

「まあそういうな、リーリヤ。仕事はきつちり終わったんだらう？」

念を押すような相手の言葉に——男の声だった——、リーリヤは歩いていた時よりも無然とした表情を浮かべる。

「疑ってるの？」

「そんなことはないさ。だがまあ、相方としては仕事の首尾っていうのは気になっちまうもんだらう」

「すぐ簡単だったよ。ターゲットが一人になったところを見計らって、調子の悪そうな女の子を演じてたら向こうから来てくれた」

「だろいな」

彼女にセリョージャと呼ばれた男……セルゲイはそう言った。

時間差を作って集合場所に向かいながら、彼は相棒であるリーリヤの姿を思い描く。

一言で言えば彼女は美人だった。いや、まだ子供なのだから美少女と言うべきか。

薄く輝く金の髪、調度品を思わせる細い手足に、整った造詣の顔立ち。

まさしく「お人形のような」女の子だ。

そんな少女が一人、辛そうな表情を浮かべていれば大抵

の男は声をかける。

それは誘蛾灯に誘われる虫によく似ていた。

命を落とすその瞬間まで、彼らは眼前の少女が自分を殺すためにやってきた暗殺者だと気付くことはない。

(ましてや)

今回のターゲット平和ボケした日本人（日本人）なのだから、効果は靦面だったことだらう。

セルゲイはそう考えてから、かぶりをふりつつ口元に笑みを浮かべた。

おつといけない。いついかなる時も、相手を侮るなかれ。この業界で生き残るための常識だ。

細い路地を抜けると視界が開け、広場が見えてくる。

彼の相棒は一人、テーブル付きの椅子にぐったりと肢体を預けていた。へばついても携帯電話だけはしつかりと耳に押し当てている。

「よう、お姫様」

セルゲイが電話口にそう話しかけると、彼女は弾かれたように身体を起こして周囲をきよるきよると見回し始める。

もし余裕があれば彼はしばらくこうして相棒（リーリヤ）を観察していたらうが、生憎そういうわけにもいかなかった。

何しろ、仕事が終わった直後なのだ。

「こつちだ、こつち」

彼女が視界に入っている以上、電話はもう必要ないと判断したセルゲイは通話を切り、ひらひらと手を振りながら声をかけた。

ほどなくしてセルゲイの姿を見つけたリーリヤは、それまでとは打って変わって表情を輝かせながらこちらへと駆け寄ってくる。

「セリョージャ、遅い」

駆けてきた彼女は眉根を寄せながら、そう言つてむくれてみせた。

さつきまでの嬉しそうな顔はどこへやら、とセルゲイは再び苦笑する。返事の代わりに彼女の頭に手を載せて、色素の薄い髪を撫でた。リーリヤは表情こそ変わらないが、嫌がることもなかった。

「これからどうするの？」

「手はもう打つてある。関係機関への欺瞞工作も含めてな。これからバスで空港へ行つてトウキョウまで飛んで、ロシアに帰る」

「モスクワまで遠いわ。退屈」

「我慢してくれ。道中で美味しいもの食わせてやるから」

「トウキョウで買いたい物」

「分かった分かった、飛行機に間に合うまでなら付き合つてやる」

お姫様のわがままに辟易しつつも領くセルゲイ。彼の回答に満足したのか、リーリヤは今度こそ天使のような笑みを浮かべて喜びの声をあげた。

彼女の心は既に東京にあるようで、足早に駅のホームへと駆けていく。

ほどなくして報道機関は今回の事件——ロシアに点在する^{オリガルヒ}財閥と強いパイプがあると噂された元議員の殺害——に関する報道を始めた。

バスに揺られながらスマートフォンでその情報を確認したセルゲイは、口元に歪な笑みを浮かべた。少なくとも、自分達が気取られているような様子はない。

この国の警察は優秀だと聞いているから、いくら緊張してはいたんだが。

リーリヤがやけに静かだと思つて目をやると、彼女は眠つてしまつていた。

セルゲイに肩にもたれかかるようにして身体を預け、小さな寝息を立てている。

バスが空港に到着するまで、しばらく時間がかかる。

ロウロウエヘム《おやすみ》、可愛い^{リーリヤ}白百合。

ほんと頭に置かれた彼の手の暖かさが伝わったのか、彼女はほんの少しだけ心地よさそうな声を上げた。

Л и л и я ・ Г л а з н о в (リーリヤ・グラズノフ)

発行日 2019年8月22日

著者 ハル
<https://www.pixiv.net/member.php?id=4987292>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
